平成１２年９月スイス旅行の記録

8月31日（木）　　曇り後大雨　　**自宅から大阪へ**

待望のヨーロッパ旅行へ向かうため、朝８時過ぎに家を出て仙台空港へ。今月８日から新規に就航したフェアリンク社の小型ジェット旅客機で１２時５５分に仙台空港を出発。約１時間半で関西国際空港へ到着。ジャンボ機と違い、５０人乗りのこの旅客機は乗り降りに時間が掛からず便利な上、窓の位置が低いため飛行中に下界の景色が良く見られるので大変気に入った。関西国際空港より南海線の電車で約３０分の羽衣へ。羽衣駅から宿泊地の大阪国際ユースホステルまで徒歩１２分とのことだったが激しい雷雨に見舞われ、やむを得ずタクシーを利用した。しかし同ユースホステルが公園内にあるためタクシーの横付けは叶わず雨の中を２～３百メートル歩くことになった。弟達も既に到着しており、「雨男のご到着！」と冷やかしながら迎えて呉れた。　ユースホステルは、さすが「国際」の名が付くだけあって欧米人の若い女性客が多く華やかな雰囲気が漂っていた。

夕食時に兄弟３人で今後の旅の安全を祈って乾杯した。

9月1日（金）／2日（土）　曇り／／小雨　　**関空発、シンガポール、チューリッヒを経てローザンヌへ**

昨日の豪雨とは打って変わり爽快な朝である。ユースホステルをチェックアウト後、徒歩で羽衣駅へ向かい８時３０分発電車で関西国際空港へ。関空到着後、仙台から送ってあったスーツケースをクロネコ宅急便の窓口から引き出してシンガポール航空の搭乗手荷物受付窓口へ引き渡した。荷物はそのまま目的地のチューリッヒ空港へ届くとのことであったがシンガポールのトランジットを考えると不安な気持ちも残った。

関西国際空港発１２時１５分、シンガポール航空(SQ496便)でシンガポールに向けて出発。約５時間後にシンガポールのチャンギ空港へ到着した。途中は気象条件にも恵まれて快適なフライトを楽しむことが出来た。

チャンギ空港は以前に訪れた時に比べ大幅に拡張整備が行われ、世界有数の国際空港としての条件が整っているように感じた。　トランジット時間に構内を見学したりインターネットカフェーで時間を費やす。インターネットを通じてはじめて海外から我が家のホームページを閲覧した感想は格別であった。　また、空港内で日本円で支払える中華レストランで長旅に備えて夕食を済ませた後、乗換ゾーンでチユーリヒ行き飛行機を待った。

シンガポール航空(SQ496便)は予定より３０分以上も遅れて２３時４５分にチャンギ空港を出発しチユーリヒに向かう。途中、マレー半島を北上し、ヒマラヤ山脈付近へ近づいた頃から気象条件が急変し、飛行機は大揺れの状態が続き遂にはじめての飛行機酔いの状態となった。暫く我慢していたが吐き気がひどくなり、吐く寸前のところで漸く揺れが治って気分も回復したが、機内食はもとより一睡も出来ないまま夜が明けてしまった。

２日早朝、予定より少し遅れて現地時間６時３８分頃にチユーリヒ国際空港へ無事到着。　入国後、直ちにスイスパスの使用開始手続きを済ませ、スーツケースを受け取った後に地下にある手荷物輸送システム・ライザーゲベック(Reisegepack)窓口へ運びローザンヌへの発送手続きを済ませた。現地では「ローザンヌ」の発音が違うらしく、危うく別の所へ発送されるところだったが荷札の記載内容に気付いて寸前に危うく難を免れた。(現地では「ロザンヌ」に近い発音のようである)

荷物の送付手続きを終えた後、地下にある電車のチユーリヒ空港駅から最初の宿泊地ローザンヌに向かった。チユーリヒ空港駅では、ホームに置き忘れてあったカメラを見付けて駅員へ届けたところ、間もなく落とし主の中国人女性が現れて本人から大変感謝され、入国早々の善行に気分を良くした。

ローザンヌには昼近くに到着し、フロン(Flon)駅近くのマノーラ（セルフサービスのレストランでガイドブックに掲載されている）で昼食を摂った後に再び電車に乗ってウシー(Ouchy)駅へ到着。駅前の船着き場から生憎の強風で波立っていたレマン湖(Lac Leman)を眺めた後、電車でローザンヌ中央駅まで引き返し手荷物を引き取った。ところが私のスーツケースが輸送中に破損（何か丸い物体に当てられたらしく大きく凹んでいた）しているのが見付かり、實君の通訳で旅行保険の適用を受けるために提出する事故証明を書くよう係員に折衝した。　しかしその相手は頑固そうで白ひげを生やした年配のフランス系の人で、英語は余り通じないらしく交渉が難航した。　破損したスーツケースを修理して欲しいと勘違いしたらしく、「２、３日預けて貰えれば修理するので入っている荷物を出して欲しい」との返事であった。　そこで「荷物を出してホテルに持ち帰りたいので段ボール箱でも借して欲しい」と要求したところ、「それはお客の責任であって当方は関知せず」との返事で折り合い付かず暫く膠着状態が続いたが、結局、英語が話せる係員を呼んできて話したところ、証明書発行の希望が理解されて一件落着となった。

實君は今回のために１年前から英会話教室に通っただけあって今回の交渉を見ていて本当に誠に頼もしい存在に思えた。その後、３人で荷物とともにタクシシーで宿泊場所であるユースホステルのジュノテル(Jeunotel)へ到着し、チェックインを済ませた後にフロン駅まで出掛け近くのレストランに入りビールで乾杯した。　帰りにこれから通う

ことになるメトロ(Metro)駅とジュノテルとの道順を確認しながら歩き２０時頃に宿に戻った。
　スイス入国後の初日は慌ただしく過ぎたが、初日から荷物のトラブルに遭遇したことを考えると今後の長旅が思いやられる気がしてならない。
　兎にも角にも今日の一日は長く感じられ、道中の疲れもあったため早めにベットに入った。外は天気は悪く小雨がパラついているようであった。

9月3日（日）　　雨時々晴れ　　**ローザンヌ滞在**

　昨日の疲れもあって今日はゆっくりと“レマン湖船の旅”に出発することにした。
　ローザンヌの港ウシー(Ouchy)から乗船し、レマン湖畔のフランス領にあるエビアン(Evian)とトノン(Tonon)を訪れた。往復ともスイスパスで１等船室を利用することが出来たが、船の旅では国境を超えても入国手続きが不要であることをここで初めて知った。
　ミネラルウォーターで世界的に知られているエビアンで水の採取現場と瓶詰め工場を探したが何処にも見当たらず、町の中心部に展示施設があったので立ち寄って見学した。エビアンでは雨に見舞われたが、トノンに着いた時には雨が上っていたので周辺を散策することにした。　公園のような場所でクラシックカーの祭りが開催されており、近隣から集まったと思われる十台程の珍しい車が展示されていた。また、中央のテントでは喉自慢大会も開催されており、太ったおばちゃんが唄を歌いながら周りでダンスを踊っていた。偶然にもこのような珍しい地元のイベントに出会えたことは幸運であり貴重な体験でもあった。
　また、ワインを醸造していると思われる城のような大きな建物にも立ち寄り、フランス語の観光案内パンフレットも置かれていたが内容はよく理解出来なかった。小さな町ではあるが良く整備されていて綺麗な印象を受けた。
レマン湖畔の小さなレストランでスパゲティの昼食を摂り、予定していたトノン発１６時４０分の船に乗船し、１８時頃にローザンヌに到着した。マノーラで各自好みの夕食を摂った後に宿に帰った。
　マノラーは地元で人気の高いセルフサービスのレストランで、店内に数十種類の料理と飲み物が並べられ、各自が側に用意された皿やコップに好きなだけ取って好みのテーブルへ運んで行って飲食することになっている。
　食べ終えた後の皿やコップ類も各自が持ってカウンタに並び精算を行うというシステムになっている。また、料理の種類によって皿の模様や形が異なっていてカウンタではそれぞれの枚数を数えることにより容易に料金を精算出来るような仕組みになっている。　従って料金を節約するには出来るだけ品数を減らして食べ物の量を多くするほど安上がりになるので、地元の学生や独身者には人気があるようである。

9月4日（月）　　小雨時々晴れ　　**ローザンヌ滞在**

　夜中に月が出ていたので晴れを期待したが、途中で小雨になり肌寒い一日であった。今日は“バス峠越えエーグルの旅”の予定である。
　朝、電車でローザンヌを発ちモントルー(Montreux)で乗換えてグシュタード(Gstaad)へ向った。モントールまではレマン湖畔に沿って朝日に輝く湖水と山沿いに続く葡萄畑を眺めながら進み、乗り換え地点のモントールに到着。
　ここで電車を乗り換えモントールを発って急勾配にさしかかり、間もなくレマン湖を見下ろす素晴らしい景色に遭遇した。高度が増すに連れて霧が立ちこめる天候になったが山中の小さな町クシュタードへ到着した。ここでバスを待つ間に町を散策したがこじんまりとした感じの良い町のようであった。グシュタードから定期バスに乗り、レ・ディアブルツ(Les Diablerets)とヴィラー(Villars)でバスを乗り換えてエーグル(Aigle)へ到着。途中の大半は雨と霧の中であったが、時々霧が晴れて氷河の一部が姿を表すこともあった。ヴィラーでバスを待つ間に近くの山麓に点在する民家の生活環境に興味を抱き歩いて探索することにした。遠くから見ると生活道路や電柱も見当たらないスイス特有の典型的風景であるが、実際に訪ねてみると自家用車を乗り入れる立派な道路が家まで続き、電気や水道も完備していることが分かった。エーグルでは雨上がりのせいか肌寒く、駅待合室で電車の到着を待ち、折り返し電車に乗り１７時にローザンヌに到着した。前日と同様にマノーラで好みの夕食をとりメトロで１８時過ぎにユースホステルのジュノテルへ戻った。
　今日の旅は雨に祟られて残念であったが、いろいろな体験も出来たし、まずまずの結果であったと思う。体験といえば今朝のモントールまでの電車の中で英語が少し話せる六十歳代と思われる女性と席を隣り合わせ話が弾んだ。
　彼女は夫に先立たれて一人暮らしとのこと、この電車で温泉地へ保養に出掛ける途中とのことであった。日本にも興味を持っている様子だったので「日本から持ってきたコメで造られた菓子です」と説明して弟が持参した磯巻き煎餅（小さな棒状の醤油味の煎餅に海苔を巻いたもの）１袋をプレゼントしたところ大変嬉しそうに受け取って呉れた。
　すっかり親しくなったところで我々はモントールで乗り換えるため別れの挨拶を交わして下車した。何気なくホー

ムから窓越しに車中の彼女の姿を窺ったところ、早速に袋を開けて磯巻き煎餅を食べていたが、何と驚いたことにの海苔を取り除いて中味だけを食べているではないか。　こんなことなら食べ方を説明しておくべきだったと後悔したが後の祭りであった。

夕方、昨日に比べ涼しくなり、青空がのぞきはじめた。明日は“シャモニー・モンブランの旅”である。

9月5日（火）　快晴　ローザンヌ滞在

昨日、一昨日と打って変わり雲一つ無い全くの快晴である。“シャモニー・モンブランの旅”に出掛けた。

朝７時１５分過ぎに宿を出たて列車でローザンヌを出発し、マルティニー(Martigny)で乗り換えて国境の駅、ル・シャテラード(Le Chatelard)まではスケジュール通りであったが、フランス領の電車時刻表に間違いがあり約１時間半遅れて１２時５６分にシャモニー・モンブラン(Chamonix-Mt.Blanc)駅に到着した。

4年前にジュネーブからバスで訪れたことがあったが今回のように電車で訪れたのは初めてで、車窓から見る白銀に覆われたモンブランの雄姿は格別である。シャモニー(Chamonix)は多くの観光客で賑わっており、空にはパラグライダーやハンググライダーが乱舞していた。

シャモニーの町はずれのケーブル駅から空中ケーブルで標高3,842mのエギーユ・デュ・ミディ(Aiguille Du Midi)展望台へ。途中の乗り継ぎ駅プラン・ド・レギュー(Plan de l'Aiguille)で少し時間をとって体調を整えたつもりであったが、さすがに3,800mを超える高さに高山病の症状が出て頭痛と歩行にふらつきを感じた。展望台から望むモンブランの主峰と回りの景色は素晴らしいものであり、前回と同様に快晴に恵まれたのは極めて幸運であったと思う。

１６時１０分発の電車でシャモニーを発ち１９時過ぎにローザンヌに帰り、すっかりお馴染みになったレストラン・マノーラで夕食を摂って２０時半過ぎに宿に帰った。

9月6日（水）　曇り後晴れ　ローザンヌ滞在

朝から曇りであったが気温は快適で、“レマン湖船の旅”を行うことにした。

ローザンヌウシー港を１０時発に乗船し、途中でフランス領の二つの港に立ち寄り、１４時過ぎにジュネーヴ(Geneve)に到着した。もちろん船はスイスパスによる一等船室であり、長時間の旅を船内のレストランでワインやビールを飲みながら過ごした。ジュネーヴへ上陸後、花時計のあるイギリス公園や市内を散策し、お土産用の時計などを購入した。また、４年前に宿泊したクリスタルホテル(Crystal Hotel)を探し当て懐かしい思いに浸った。ホテルのすぐ近くにあるジュネーヴ中央駅・コルナヴァン駅(Gare de Cornavin)で夕食のパンと食料を買い込み急行電車でローザンヌに戻り、１９時過ぎに宿に着き夕食を摂った。

明日はパノラマ急行でシュピーツ(Spiez)に向かう予定である。

9月7日（木）　小雨後曇り後晴れ　ローザンヌからシュピーツへ移動

昨夜半から雨が降りはじめ午前中まで残った。宿泊費の精算を済ませた後、タクシーを呼び８時３０分頃にユースホステル・ジュノテルを出発しローザンヌ中央駅で手荷物の託送手続きを行った。その後、電車でウーシーへ行き、駅から歩いて１５分程の所にあるオリンピック博物館を駆け足で見学した。

１０時発電車で６日間過ごしたローザンヌを後にしモントルー(Montreu)でパノラマ急行・ゴールデン・パス(Golden Pass)に乗換えてシュピーツに向かう。途中のツバイジンメン(Zweisimmen)で普通電車に乗り換えてシュピーツへ到着。さらにシュピーツからインターシティ(Inter City)に乗りインターラーケン西駅(Interlaken West)で降り、4年前に歩いた思い出深い目抜き通りを歩いた。途中、公園の近くでパンで昼食を済ませ暫く休憩後、インターラーケン東駅(Interlaken Ost)まで歩いた。

東駅付近のコープで珍しい花の種子などを購入した後、１６時４０分発のインターシティでインターラーケンを発って次の滞在地シュピーツに到着し、予約してあったホテル・デス・アルプス(Hote Des Alpes)へ直行した。

ホテルのチェックインを済ませた後に荷物を受け取りに駅に戻り、ホテル迄の約250mの急な下りの坂道を荷物を引きながら運んだ。

ホテルはグリンデルワルト日本語案内所の紹介によるものであったが、トゥーン湖(Thuner See)の湖畔の高台にあって環境の素晴らしさとホテルの家族的雰囲気が大いに気に入った。

荷物を解き、シャワーを浴びた後に三人揃って夕暮れの湖畔を散歩したが、ゆったりとした静かな雰囲気が感じられた。

9月8日（金）　　晴れ　　シュピーツ滞在

シュピーツ滞在一日目の今日は、かねて計画していた“中央アルプス峠越えバスの旅”に出掛けることにした。

シュピーツ発７時５分の電車に乗り８時１３分にマイリンゲン(Meiringen)へ到着。バスに乗換えて山へ向かったが途中の小さな町の郵便局で道路の落石情報を受け、そこで３０分ほど待機した後に再出発した。山に入るに従って次第に道が険しくなり、絶壁の岩肌を削って造られたバス１台がやっと通れるほどの細い道を進むうちに前方に先程の情報の落石現場が現れ、重さ５ｔ以上もあろうかと思われる大きな石を目にした。石は既に道路の端へ避けられていたが、作業に使われたブルトーザーが道路を塞いでいて進むことが不可能な状態であった。しかも作業員の姿が一人も見当たらず何処かで休憩している様子であった。仕方なく運転手が降りて行き十数分後に作業員らしい二、三人と一緒に戻って来た。しばらく話し合いをしていたが交渉が纏まったらしく、ブルトーザーを前方約150m先の道がやや広くなった所まで移動させてくれた。ようやく通れるようになり、バスは石を避けながら崖っぷちすれすれの状態で現場を通り過ぎることが出来たが、進行方向右側の後部座席にいた私からは身体が絶壁の谷底に突き出されるような状態になって強い恐怖感を味わった。

現地ドライバーの優れた運転技術に感心するとともに危険に遭遇しながら沈着冷静に対処している姿に頭が下がる思いであった。

このようなアクシデントのために予定のタイムスケジュールは大幅に狂ってしまい、その後、グリムゼル峠(Grimsel Pass)とグレッチュ(Gletsch)でバスを乗り継ぎオベラワルト(Obelwald)へ到着したが、タッチの差でフルカ峠(Furka Pass)へのバスに乗り遅れてしまった。

予定を変更してアンデルマット(Andermatt)まで電車で行き、昼食にワインとピザを摂った後、石畳の町の中を散策した。山が近くに迫り清流もあってスイスらしい雰囲気の静かな感じの町であった。

その後、電車でゲッシュネン(Göschenen)まで行き、バスに乗換えてスーステン峠(Susten Pass)経由でマイリンゲンへ戻り、電車で１９時過ぎにシュピーツへ帰り、ホテルのテラスで夕食を摂った。折良く満月（中秋の名月？）で月光に照らされたアルプスの山々と湖の美しさを堪能することが出来た。

今日は思わぬアクシデントに見舞われ強行軍であったため疲れたが大変楽しい一日を過ごすことが出来たと思う。とりわけゲッシュネンでバスを待つ間に停留所前の土産物店に入り沢山の珍しい石を買い込んだのが良い記念になった。

9月9日（土）　　快晴　　シュピーツ滞在

今日の予定は標高2168mのフィルスト(First)と４年前にケーブル駅まで辿り着きながら時間切れで果たせなかった標高2970mのシルトホルン(Schilthorn)に登ることである。

朝、電車でシュピーツを発ってグリンデルワルト(Gridelwald)に直行。日本語案内所に立ち寄った後、近くのゴンドラ駅からフィルストに向かう。全長5226mのゴンドラは３区間に分かれていて途中、ボルト(Bort)とグリンデル(Grindel)の２つの駅で乗り換えフィルスト頂上駅に着く。途中および頂上からはベルナー・オーバーランドの4000mを超える峰々が白銀に輝やいて見え、まさに感動的な眺めであった。

頂上駅付近は草原になっており、そこからバッハアルプ湖(Bachalp See)へのハイキングコースがあって大勢の人々が歩いていたが時間の都合で途中まで行って引き返した。頂上にはテレビカメラが設置され、その様子を麓のグリンデルワルト駅のモニターで見ることが出来るようになっていた。約１時間ほど滞在した後にゴンドラでグリンデルワルトへ戻り、次いで登山電車でクライネシャイディック(Kleine Scheidegg)まで出掛けた。ここでアイガー北壁を眺めながら草原に腰を下ろし持参した昼食を食べた。草原には牛が放牧されているため各所に牛糞が散乱しており、腰を下ろす場所を探すのに苦労した。

昼食後、登山電車でユングフラウヨッホ(Jungfrau Joch)へ足を延ばすことも考えたが過去に何度も訪れているため取りやめ、代わりにラウターブルネン(Lauterbrunnen)方面に向かって線路沿いにパノラマ遠足を楽しむことにした。天気も良く気温が上昇したためか偶然にも氷河の先端が崩落する光景に遭遇した。周囲にこだまする轟音と共に雪煙を上げて崩落する光景を間近に見て、急いでカメラを向けたがデジカメの悲しさで起動が遅く、ようやく撮影可能になった時には崩落は既に終息段階を迎えており、残念ながら写真に収めることが出来なかった。

アイガー、メンヒ、ユングフラウの三山の雄姿を眼前に見ながらウエンゲン(Wengen)まで歩いて下ることを決意しクライネシャイディックを発ったが、歩いてみるとあまりに遠過ぎて途中で断念し、ウエンゲルンアルプ(Wengernalp)から電車に乗りラウターブルネン(Lauterbrunnen)へ到着した。更にケーブルと電車を乗り継いでミューレン(Mürren)へ行き、そこからケーブルで念願のシルトホルンへ登った。

頂上の回転展望レストランから眺めるアイガー、メンヒ、ユングフラウをばじめスイスアルプスの景観は素晴らし

く何時までも留まっていたい気分であったが帰り時間が迫り後ろ髪を引かれる思いで帰途についた。
帰りはギンメルヴアルト(Gimmelwald)経由でレンクヴアルト駅（ｹｰﾌﾞﾙ駅）に到着し、更にバスでラウターブルネンへ到着。そこから電車でシュピーツへ帰った。
今日も快晴に恵まれ、前日に続き強行軍であったがハッピーな一日であったと思う。

9月10日（日）　　晴れ　　シュピーツ滞在

シュピーツ発９時６分の電車でスイスの首都ベルン(Bern)へ出掛けたが、あいにく日曜日のため店は開いておらず静かな雰囲気の中での市内見物となった。人口１３万人の都市だけに大変落ち着いた静かな町といった印象である。
ベルン駅前から市内案内図を頼りに歩きながら市内を流れるアーレ(Aare)川の橋を渡りスイス山岳博物館(Alpines Museum)へ到着し見学した。１９９３年に開設されたといわれるこの博物館は、吹き抜けのホールの中央にベルナー・オーバーランド・アルプスの大きなジオラマが置かれ、上階や途中の踊り場から俯瞰出来るようになっている。また、スキーの歴史、山岳民族の風俗や動植物の珍しい標本などが展示されていて大変興味深かった。
続いて近くにある自然博物館(Naturhistorisches Museum)を見学。ここには動物学、鉱物学、地質学、古生物学などのコレクションのほかに大ホールには動物を中心としたアフリカ自然界の展示が行われていた。とりわけ興味を惹いたのは各種鉱物標本で、人の丈程もある結晶水晶や鮮やかな色彩を放つ鉱石などであった。館内の売店兼レストランで昼食を摂った後に隣接しているスイス郵便・通信博物館(PTT-Museum)へ赴き見学した。
館内では過去１５０年間のスイスの郵便とポストバスなどの交通輸送の発展の歴史が展示され、世界最初の郵便切手も見ることが出来た。また、展示を兼ねて館内で利用されている上昇回転スィッチ式の自動電話交換機やタコの形をした水銀整流器など半世紀前の装置が現在も稼働していることに驚いた。　別棟にはインターネットルームも設けられ入館者が自由に利用できるようになっていたので、私のホームページにアクセスしてみたところ接続には成功したものの、何か無意味な英数文字列が十数個表示されただけで期待していた写真は表示されなかった。
担当の女性職員に来て貰って再度挑戦してみたが結果は同じであった。　パソコンのオペレーションシステムは、Windowsのドイツ語版であったが、漢字コードを用いている日本語のテキスト部分は無理にとしてもJPEG形式の画像ファイルは表示出来るのではと期待したが残念であった。
３つの博物館を見学後に歩いて市内中心部に戻る途中、キルヒェンフェルト橋(Kirchenfeldbruche)から眺めるアーレ川の堰とやや遠くに聳えるスイス最大のゴシック建築を誇る大寺院(Munster)の巨塔を見て歴史の重みを感じさせられた。(目下、大寺院は改修工事中らしく一部にシートが張られていた)
ベルン市内の中心部では、からくり時計を仕組んだ時計塔やその近くにある食人鬼の噴水(Kindlifresserbrunnen)などを見学したが、古い石畳の道を観光馬車が往来している情景はまさに町全体が博物館のように思えた。
ここでも４年前に宿泊したホテル・クロイツ(Hotel Kreuz)を捜し当て懐かしい思いに浸った。
今日は休日であったために人出も少なく、市内観光や博物館の見学には却って幸いだったように思う。
ホテルに戻りホテルのレストランで夕食を摂ったが、日曜日とためかお馴染みのウェーターが休んでいて代わのに女子高生のアルバイトらしいドイツ系の美少女が対応していた。彼女には英語が全く通じないらしく、飲食物を注文するのに困ったが、しかし純真で可愛らしく親切で心のこもった対応に大変好感が持てた。
明日は、トウーン湖(Thuner See)とブリエンツ湖(Brienzer See)の湖船の旅を楽しむ予定である。

9月11日（月）　　快晴　　シュピーツ滞在

シュピーツ発９時２分の電車でトゥーン(Thun)へ到着、駅近くの港から９時５４分発定期船に乗りインターラーケンヴエスト(Interlaken West)に向かうトゥーン湖の船旅を楽しんだ。乗客にはお年寄りが多く船はほぼ満席に近い状態であったが、途中にシュピーツ港にも立ち寄り斜面に建つ滞在中のホテル、デスアルプスを湖上から眺めることが出来た。
船は１２時にインターラーケンヴェストに到着。そこから歩いてインターラーケンオスト(Interlaken Ost)へ行き、ブリエンツ湖の定期船に乗るの予定であったが、あいにく予定の船がなくやむを得ずブリエンツ湖の船旅を諦めて電車で木工彫刻で有名なブリエンツを訪れることとした。
トゥーン湖とブリエンツ湖の間は運河のような川で結ばれ、両湖の間に水位差があるためか市内を流れるこの川はブリエンツ湖からトゥーン湖に向かって可成りの流速で大量の水が流れていた。また、インターラーケンオスト駅の電車ホームに隣接してブリエンツ湖の船着き場があって、電車と船が並んで停泊している珍しい光景を見て、この町は陸上と水上の交通の要衝であるとの印象を強くした。
ブリエンツに着いて近くのコープで昼食を調達し、ブリエンツ湖を望む町外れの小さな公園のベンチに腰を下ろし

て食べた。小さな町ではあるが有名な観光名所になっているためか多くの観光客が訪れていたが日本人の姿は見られなかった。
　この町に木彫り職人を養成するための専門学校があるとのことであったので、そこを訪ねあわよくば実習風景などを見学出来るだろうと期待しながら探し歩いた。
　駅から２Ｋｍ程歩いた所の小高い斜面の建物に「Kantonale Schnitzler Schule」と書かれているのを見付けて早速訪ねてみた。玄関の脇に作品を展示した小さな部屋があり、そこが外来者の受付になっているようであったので入って木彫りの作品を見ながら待つことにした。しばらくして係員が現れたので校内の見学をお願いしたが断られた。(外来者には公開しないことになっているらしい)
　駅に戻る途中の土産物店の店先に「日本語で買い物が出来ます・・」と日本語で書かれた張り紙を見付けたので興味半分でその店に入ったところ、４０歳代後半と思われる日本人女性が親切に対応して呉れた。その女性はスイス人と結婚し、以来２０年近くも日本に帰っていないとのこと、現在はベルン市郊外からここへ通勤しているとの話であった。この女性の熱心な薦めもあって民族衣装をまとって椅子に腰掛けている老夫婦の木彫り人形を記念に購入した。現地特産の有名な木彫り人形だけあって値段も高く、値引きして貰ったにもかかわらず日本円換算で約９千円もした。
　帰り道で駅近くを歩いている時に甲高い警笛と煙が上がるのが見えたので現場に急行したところ、かの有名なロートホルン(Rot Horn)行きのミニ蒸気機関車(SL)であった。スイスには登山鉄道の主なものだけでも十指を超えるが、蒸気機関車で運行しているのはここブリエンツ・ロートホルン鉄道だけとのこと。小さなSLが煙を吐きながら真っ赤な客車を押して山を登っていく姿はまさにメルヘンの世界を思わせ観光客に人気が高いようである。もう少し時間があれば乗ってみたい気持ちであったが諦めて１６時過ぎの電車でシュピーツに帰ることにした。
　シュピーツに到着後、ホテルで翌日ブリーク(Brig)へ移動するための荷物をスーツケースに纏めて駅へ運び発送した。また、郵便局に立ち寄り小包郵便用のダンボール箱を購入して帰り、これまでに買い集めた石などの土産品を自宅に発送するための荷造りを行った。
　今日は大変蒸し暑く汗だくであったがシュピーツ最後の夜である。明日はブリーク(Brig)へ移動することになるが、送ったスーツケースがブリークへ届く頃までの間をベルンで時間を過ごす予定にした。

9月12日（火）　　晴れ、暑い　　**シュピーツからブリークへ移動**

　昨夜のうちに荷物を駅まで運び発送手続きを済ませていたので今朝は比較的余裕があり、朝一番で郵便小包を送ることにした。料金の５２ＳＦは少々高い気もするが帰国時の荷物を出来るだけ軽くするためにはやむを得ないだろう。
　外国小包便の発送手続きは意外に手間取り、予定していた９時６分発ベルン行き電車に乗り遅れてしまった。やむを得ず次の１０時６分発電車を待つ間に周辺の町並みを散策すことにした。ホームセンターに入ったところ、かねてより探し求めていたスイスチャードの種子が見付かり、数種類の珍しい草花の種子とともに購入した。
　電車は１０時４０頃にベルンに到着し、運良く駅前広場では恒例の朝市が開かれ大勢の人々で賑わっていた。売られているのは野菜、果物、花、日用品雑貨など多種多様であったが、ひときわ目を惹いたのは珍しい天然石を売る店であった。スイス旅行中に各所で珍しい天然石を買い求めて来ただけに早速に数点を選び購入することにした。店主も我々に大変好意的でわざわざ石の名前を紙に書いて教えてくれたり、値札より可成り値引きしてくれた。
　朝市と言っても単に物品を売買するだけでなく、人々が交流する一種のお祭りのように思えた。市場の一角には喜劇王チャップリンに変装した道化師が演技して人々の笑いを誘っていた。
　その後、ベルン市内を散策することにしたが一昨日の来訪時とは打って変わり市内は活気を呈していた。最初にアインシュタイン・ハウス(Einsteinhaus)を訪ね、ベルンの特許局に勤務していた若い頃に暮らしていたといわれるレストランのある建物の３階の部屋を見学した。部屋には彼の業績を記したパネルや写真の他、実際に使用していたと言われる当時の椅子や机なども展示され、その椅子に座ってみることも出来た。実際にその椅子に座って写真を撮ったが、心なしか何か新しい発想が湧いてくるような不思議な気分になった。
　市内を散策中に石や化石を販売する専門店を見付けて中に入ったが、その店では大小様々の美しい石やアンモナイトの化石などが売られており、値段もあまり高くはなかった。これまでは小さな物ばかりを数多く買い求めてきたが、どうせ記念にするのであればこの店で２～３万円程度の置物を購入すれば良かったかとも思った。
　１３時２２分発電車でベルンを離れ１５時頃に次の滞在地ブリーク(Brig)へ到着。荷物は未だ到着していなかったので、そのままホテル・ビクトリア(Hotel Victoria)へ行きチェックインを済ませた。このホテルもシュピーツと同様に自分達で見付けることが出来ずにグリンデルワルト日本語案内所の紹介によるものであったが、駅から100m程度と便利な位置にあって部屋も夫婦と子供二人程度が宿泊できるベットとスペースがあってなかなか快適そうである。
　駅まで荷物を引き取りに出掛け、大通りを横切って荷物を引いて運んだ。部屋に戻り交代で洗濯をした。

9月13日（水）　　小雨後晴れ　　ブリーク滞在

夜半から夜明けにかけて物凄い雷雨に見舞われ、暗闇の中で稲妻が走るたびに山々が鮮明に映し出される情景が繰り返された。朝には雷雨が治まったのでロイカーバート(Leukerbad)温泉と標高2322ｍのゲンミ峠(Gemmipass)へ出掛けることにした。

ブリーク発９時３５分の電車でロイク(Leuk)まで行き、そこでロイカーバート行きバスに乗り換えて曲がりくねった山道を３０分程登ると終点に到着である。終点は町で一番高い位置にあり、バスターミナルと観光案内を兼ねた建物になっていた。

温泉地とはいうものの日本のそれとは違い大きな共同浴場が２カ所あるだけで他は土産物店やホテルなどが軒を連ねていた。バスターミナルから歩いて１０分ほどの所にある共同浴場に入り、ヨーロッパの温泉を初めて体験することになったが、印象としてヘルスセンターかレジャー施設のような感じであった。

受付で入浴券を購入した後、ロッカールームに入って水着に着替えて裸足で浴場へ進む。浴場は数十人が入れるような楕円形をした大きなプールになっていた。屋内と屋外にそれぞれ設けられていたが露天風呂の雰囲気を味わうため屋外にした。出入り口近くにシャワー施設があって、ここでシャワーを浴びてから入浴することになっている。お湯の温度は３７度と低いため、お湯から出ると寒いくらいで日本の温泉とは大違いであった。プールと一角に強力なジェットを噴出する泡マッサージ施設が十数台置かれていて人々は代わる代わるそれを利用していた。ジェット水流が強いので捕まり棒に捕まりながら寝た姿勢でいないと流されそうであった。時々ジェット水流に当たりながら３０分程お湯に浸かっていると身体の芯から暖まり、お湯から出た後もポカポカして爽快な気分であった。

入浴後、ホールの片隅に設置されていたインターネット用パソコンを借りてアクセスしてみたが僻地のためか通信環境が悪く殆ど使いものにはならなかった。

館内レストランの屋外テラスで野菜サラダと軽食を摂った後、町はずれにあるケーブル駅へ行き、そこから一気に標高2322ｍのゲンミ峠の頂上駅まで登った。ちなみにロイカーバートの標高は1401ｍである。

頂上駅付近は荒涼たる岩肌で近くの小さな湖まで道が続いており、ロイカーバートを見下ろすと町の家々が箱庭のように美しく見えた。

雲が低く垂れ込めていて風が強く、とても長時間留まれる状態ではなかったが、殺風景な景色の中を湖まで往復約２Ｋｍ程を散策した後、早々に下山した。頂上付近にはアザミに似た高山植物の群生も見られた。

山を下りて再びロイカーバートの町を散策した。ケーブル駅近くに「ねずみ返し」と呼ばれる構造をもったスイス伝統の高床式穀物倉庫が多く見られ興味を惹いた。その後、バスと電車を乗り継いでブリークに帰った。

明日は期待の氷河村、サース・フェー(Saas Fee)で氷河歩きを予定している。

9月14日（木）　　快晴　　ブリーク滞在

今日は“サース・フェー（氷河村）のバスの旅”である。直前まで天気が心配でサース・フェーに行くべきかアレッチ氷河見物に行くべきか迷ったが結局サース・フェーに決まり、ブリーク発８時１５分のバスでサース・フェーに向かった。

バスは約１時間でサース・フェーに到着し、そこからケーブルとゴンドラを乗り継いで標高3456ｍのミッテルアラリン(Mittelallalin)へ登った。　回転展望レストランのある終点駅を出ると一面の銀世界で、ここは標高4027ｍのアラリンホルン(Allalihorn)から延びる稜線の途中に位置していた。稜線に沿って氷河の上を約２Ｋｍ程歩くとスキー場があり、大勢のスキーヤーやスノーボーダー達が気持ち良く滑っている様子を間近に見ることが出来た。そういえば途中のゴンドラの中で日本の有名な女子スノートボーダー選手がマネージャーを伴ってスキー場に行くのに乗り合わせたが、ここは世界的な有名選手の絶好の練習の場になっているらしい。

ゴンドラを降りてから興味半分で雪原を歩いて行くと無意識のうちに滑降斜面まで近づいてしまった。ふと気が付くと急斜面の真っ直中に立っており、しかも滑り安い化繊のアノラックを着ていたため、このまま転げ落ちたらどうなることかと思った瞬間、急に恐怖感を覚えで必死の思いで這うようにして降りてきた。

再びゴンドラ駅に戻り下山しようとしたが、あいにくゴンドラは１２時から１３時１５分まで昼休み時間帯に入っており、仕方なく時間まで周辺の氷河の上を散策することにした。

絶好の快晴に恵まれて北にはローヌ谷の向こうの峰々が、南側にはイタリア国境の山並みが素晴らしい景観を呈していた。また、氷河上では何万年もの歳月をかけて流れてきたと思われる珍しい小石を拾い記念として持ち帰ることにした。　下山後、予約していた１６時３５分のバスでサース・フェーを出発し、１７時半頃にブリークに帰った。

今日は初めての氷河歩きを経験し大変有意義な一日であった。

明日はアレッチ氷河(Aletschgletscher)の見学に出掛ける予定である。

9月15日（金）　　快晴　　ブリーク滞在

昨日のサース・フェーに引き続き、今日はヨーロッパ最大の氷河、“アレッチ氷河地域の旅”の予定である。

ホテル前のＦＯ駅発８時５０分の電車でブリークを発ち、９時２０分頃にフィーシュ(Fiesch)へ到着し、そこからロープウェイで標高2927mのエッギスホルン(Eggishorn)へ登った。

すぐ目の前にユングフラウ(Jungfrau)から何万年もの歳月を経て流れ下ったく全長３２Ｋmのアレッチ氷河が現れ、削られた岩石が氷の上に積み重なって車の轍のような景観を呈しているのを見ると、その名の通り氷が川のように流れていることを実感する。空気が澄んでいるためか間近に手に取るように見えるが、時折、スイス空軍のジェット戦闘機の編隊が爆音をあげて氷河上空の谷を通過して行くのを見ると可成り距離のあるのが分かる。しかし見た目のあまりの近さに氷河へ降りてみようとしたが、近くにいたベテランらしいオランダ人夫妻に「あなた方には無理″too hard‥″だ」と言って制止させられた。

憧れのマッターホルンが予想した方向に初めて遠望できて胸が高鳴るのを感じた。素晴らしい快晴に恵まれてこのままロープウェイで下りるのは惜しい気がしたので岩山の登山道を歩いて下山しトレッキング気分を味わうことにした。

下山途中でアルプス人気者のマーモットに出会ったりして楽しい思いもしたが、エッギスホルンからベトマーアルプ(Bettmeralp)までの約三時間の道のりはやや強行軍であった。

エッギスホルンから下りて間もない所で、頂上で馴染みになった地元スイス人の老夫婦に再び出会い記念に写真を撮らせて貰った。彼らはロープウェイで先回りで下山し、ゆっくりと日光浴を楽しんでいた様子であった。さすがアルプスの国だけあって若い人だけてなく老人男女が気軽にトレッキングを楽しんでいる姿を多く見掛けるようである。

ベトマーアルプからゴンドラに乗って標高2650mのベトマーグラードへ上り、再びアレッチ氷河の壮大な景観を堪能した。エッギスホルンより可成り下流の位置にあるが氷河の終端は見えず、その長大さをあらためて実感させられた。

観光客の中に地元の田舎の若者達とみられる数人の男女グループがいて言葉は通じないがゼスチャーから写真へ一緒に入って欲しい様子であったので気軽に応じたところ大喜びされた。彼らには東洋人が珍しいらしく、思わぬところで国際親善を果たす結果となった。

再びゴンドラに乗って下山し、麓のベッテン(Betten)駅から電車でブリークへ帰った。

今日はブリーク滞在最後の夜であり、イタリア人のウェーターと約束しながら当方の都合で延期されていたスイス郷土料理のチーズフォンデュを夕食に注文しワインとビールで乾杯した。ここのチーズフォンデュは塩分が強く、以前にどこかで食べたものよりは不味い気がした。また、当のイタリア人のウェーターも交代時間だったようで慌ただしく去って行ってしまい、お世話になったお礼の挨拶を交わすつもりだったが残念であった。

今日でブリークは最後で明日は憧れのマッターホルン(Matterhorn)の麓の町、ツェルマット(Zermatt)に移動の予定である。

9月16日（土）　　曇り後晴れ　　ブリークからツェルマットへ移動

朝一番でブリーク駅から荷物をツェルマットへ向けて発送した。その後、ブリーク発８時４５分の電車でフィーシュへ行きお土産用の買い物をした。お目当ては昨日見付けた民芸品を製造販売する一軒の店であったが、あいにく今日は店が閉まっており、近所の人に尋ねたところ店主は遠方から通勤しているので何時店が開くか分からないとのことであった。

仕方なく少し離れた所にある一軒の小さな土産物兼雑貨店に入って品定め中に地元の婦人達が内職として製作し販売を委託されているという豪華なスイス刺繍を見付け購入した。大きなテーブルクロスで實君も購入することになり値段交渉の結果、値札より大幅に値引きしてくれた。また、現金の手持ちが少なかったのでクレジットカードでもよいかと聞いたところＯＫとの返事だったのでこれに決め、提示された伝票にサインした。それにしても日本では考えられないような田舎の小さな店にもクレジット支払いのための端末装置が用意されているとはさすが国際観光地スイスである。

その後、フィーシュ発１２時２３分発の電車に乗り１４時３７分にツェルマットへ到着した。既に到着していた荷物を受け取って駅前から電気自動車のタクシーで宿泊予定のユースホステルに向かった。初めて経験する電気自動車の乗車であったが、石畳の道路のせいか振動も多く乗り心地はあまり良くなかった。

ツェルマットのユースホステルは町外れ小高い山の高台にあってタクシーが近づけず、重いスーツケースを携えた

まま坂下の遙か手前で降ろされてしまった。宿に辿り着くためにはそこから１００m以上も急な坂道を登らねばならず、われわれ高齢者にとってはまさに難行苦行の道程であった。
途方に暮れたあげく仕方なく意を決して運びはじめた頃に、散歩途中と思われる現地の青年二人が通りかかり、何も言わずにわれわれの重い荷物を宿の入口まで運び上げてくれた。すっかり感激してお礼を言うと当然のことをしたかのような面もちで笑顔を残しながら去って行った。
この様子をユースホステルの中庭でベンチに腰を下ろながら眺めている数人の学生風日本人青年がいたが、彼らは全く無関心を装っている様子であった。また、ユースホステル内でも宿泊客の半数近くが日本人の若者（多くは学生）であったが、彼らのマナーの悪さが目立ち、先の二人の青年の行為を思い浮かべながら同じ日本人として恥ずかしいやら情けない思いを禁じ得なかった。
到着時の天候は雨上がり直後で、期待していたマッターホルンも厚い雲に隠れて見えなかったが、夕暮れ近くになってその雄大な姿を現わし思わず歓声を上げた。宿泊者の中には５日間滞在したが遂にマッターホルンの姿を見れずに帰った人もいたそうであるが、我々は到着直後に見ることが出来たとは幸運であり幸先が良いように思う。
ユースホステルは、マッターホルンの雄姿を眺めるのに絶好の位置に建てられ、広い中庭を有する４階建であったが、部屋に置かれた二段ベットの造りが貧弱で、上で寝返りを打つと下の人に地震のように振動が伝わり睡眠を阻害するといった代物であった。
しかし、前に泊まったローザンヌのユースホステルと違いトイレ、シャワールーム、ウオツシングルームがそれぞれ分かれているのが便利ではある。
宿泊客の半分近くが日本人の若い男女のようであるが、中には地元の人とみられる家族連れの姿もあった。
明日以降の天候の回復を願いながら早めにベットに入った。

9月17日（日）　　快晴　　ツェルマット滞在

朝、小鳥の囀りに目を覚まし窓を開けて外を見たところ未だ薄暗い空に星が輝やき、すぐ近くに見上げるようなマッターホルンの姿がぼんやりと浮かんでいた。天気は快晴のようで一同が歓喜の声を上げて喜んだ。
日の出が近付くに従いマッターホルンの姿が一段と鮮明になり、頂上部分の絶壁の岩肌が赤味を帯びはじめたかと思うと次第に朝焼けのピンクに変化し、やがて金色に輝いて行くのが観察された。これこそが写真雑誌などでプロ写真家の作品で見たことがあった朝焼けのマッターホルンの姿だと思って夢中でシャッターを押した。
朝食時に日本人の若い女性達と食卓を囲んで旅行計画などの情報を交換しながら歓談した。単身で来たと言っていた二十歳前後の一人は、この地に関する予備知識もなく、行動計画も全く持っていないことに驚いた。彼女の言動から我々の行動計画に加えて貰い、あわよくば金銭面の恩恵も受けたいとの魂胆も見えて不愉快に思うとともにその姿勢に危うさを感じた。帰国後にインターネットで知ったことであるが、我々が宿泊した少し前に同ユースホステルに宿泊した若い女性が消息を絶ち未だ行方不明とのことであり、このような女性の軽率な行動が災いをもたらしたと考えると問題は一層深刻に感じられてならない。
朝から素晴らしい快晴に恵まれ、歩いて２０分程の町外れのケーブル駅から標高2293mのスネガ(Sunnegga)展望台までケーブルで登り、さらにゴンドラで標高3103mのウンターロートホルン(Unterrothorn)まで登った。
4000mの山々を360度に近い状況で展望できたが、とりわけマッターホルンの美しさは格別であった。これまで見てきたサース・フェーもアレッチ氷河もそして今日のマッターホルンも何故か快晴に恵まれ本当にラッキーである。
帰りはスネガ展望台から歩いて下ることになり、途中でマッターホルンが倒影するので有名なリッフェル湖(Riffelsee)に立ち寄って周りを散策し「逆さマッターホルン」の撮影にも成功した。
１５時半頃に宿へ戻り、シャワーを浴び洗濯をした後、町を散歩した。日本語案内所の看板を見付けてそこに立ち寄った。案内所は横道の奥まった場所の一室にあってグリンデルワルト日本語案内所とは大違いで所長一人だけで運営されているようであった。不意に訪ねたにもかかわらず親切に応対してくれて、明日の計画のための情報やツェルマット周辺の観光情報を収集することが出来た。
説明によればツェルマットで一番美しい時期は雪に覆われた冬季でとのこと。また、マッターホルンの登頂はしっかりしたガイドさえ付ければそれ程困難ではなく、現に六十歳代の日本人女性が毎年登頂しているとのことであった。
宿に戻る途中にスポーツ店に立ち寄り、氷河を歩くのに必要な杖を購入した。
明日は天気が良い見込みなのでこの地域で一番高い標高3820mのクラインマッターホルン(Klein Matterhorn)へケーブルで登り、そこからマッターホルンの東壁と南壁を眺める予定である。

9月18日（月）　　晴れ時々ガスがかかる　　ツェルマット湖滞在

クラインマッターホルンを目指し、天候を気にしながら出掛けた。途中の乗継ぎ駅の標高2939mのトロッケナーシュテーク(Trockenerseg)でケーブルを降りてひとまず景色を眺めることにした。

駅近くからイタリア国境に向けクラインマッターホルンを取りまくようにして流れるテオトル氷河(Theodulgletscher)が見え、しかも氷上をブルトーザーで造成された立派な道が続いていたので、思い切ってクラインマッターホルン迄氷河の上を歩いて登ることにした。このコースは昨日の日本語案内所の所長が推奨したコースであったが、如何になだらかとはいえ下りと上りとは体力的に大違いであり、今にして思えば恐らく彼はクラインマッターホルンまでケーブルで登りそこから氷河の上を歩いて下ることを薦めたらしい。

氷河の上に造られた道はほぼ直線のなだらかな勾配が続き、５０m間隔で数mの道幅の両側にポールが立てられていて危険はなさそうであったが人影は少なく、我々の前を男女二人が互いにザイルで結びながら馴れた足取りで登って行く姿を見掛けただけであった。

歩き始めた最初は軽快な足取りで５０mの４区間を進む毎に小休憩するペースで登って行ったが、高度が増すに連れて次第にペースが落ちて最後には辛うじて１区間を進むのがやっとの状態になってしまった。しかも途中で何度か強風と猛吹雪にも襲われ、高山の気候変化の恐ろしさを身をもって体験した。

３時間ほど歩いて標高3500mのイタリア国境にある山小屋兼レストランに辿り着き、ここでバスターとオレンジジュースの昼食を摂った。メニューはイタリア語での表示のため、内容はさっぱり分からなかったがスイスフランが通用していたので幸いだった。値段表示もイタリア通貨のリラだったがスイスフランに比べ４桁も数値が違うのには面食らった。しかし三人分の昼食代が５０スイスフラン済んでひとまず安心した。

ここからクラインマッターホルンへの残りの標高差300m程度であったが体力、気力共に限界を感じたため、登るのを諦めて同じ道をトロッケナーシュテークまで引き返すことにした。

さすがに下りは格段に楽で１時間ほどでトロッケナーシュテークへ戻ることが出来た。我々が辿った道はクラインマッターホルン近くのスキー場からの帰りのコースらしく、練習を終えたスキーヤーが我々を追い越して軽快に滑り降りて行く姿に何度も出会った。

トロッケナーシュテークに戻った後、急いでケーブルでクラインマッターホルンへ往復しようとしたが、強風のため運転休止中で運用開始の見通しが立たないとのことであった。

やむを得ずそのままツェルマットに帰ったが、もしもあのまま無理に歩いてクラインマッターホルンに登っていたらケーブルの運転休止で帰れなかったことを考えると不幸中の幸いだったと思う。

今日は体力的に限界に近い苦労もしたが、かねてからの夢であった氷河の上を長距離にわたり歩くといった貴重な経験を果たすことが出来て忘れ難い一日であった。

9月19日（火）　　小雨　　**ツェルマット滞在**

今日は天気が悪いので山登りを諦め、南スイスの町ロカルノ(Locarno)へ出掛けることにした。電車でそこへ行くには国境を越えてイタリア領に入り、再び国境を越えてスイス領に入ると言った複雑なコースを辿らなければならないが何事も経験と思って実行を決意した。

ツェルマット発９時１０分の電車でブリークに行き、ここで１１時発イタリア行き国際列車に乗り換え、スイスとイタリアに跨る全長１９．８Kmのシンプロン・トンネル(Simplon Tunnel)を通過し、イタリア領のドモドッソホラ(Domodossola)で下車して１１時４６分発電車に乗換え再びスイス領に入り１３時３５分にルカルノに到着した。

船の場合とは違い国境通過のチェックが厳しく、列車にはスイス、イタリア両国の武装警察官２名が乗り込み、国境越えの都度にパスポートチェックが行われ、今日一日で計４回のパスポートの提示を求められた。

ロカルノの町はイタリアとの国境の湖、マッジョーレ湖(Lago Maggiore)の北端に位置した国際リゾート地でスイス国内では最も標高が低い場所とのことである。

湖畔から背後の山の中腹にかけてデラックスなホテルや別荘が点在し、市内中央部の桟橋はマッジョーレ湖周遊の遊覧船で賑わっていた。また、周辺には１４世紀に建てられたヴィスコンテ城(Castello Visconti)や１５世紀に建てられたマドンナ・デル・サッソ寺院(Madonna del Sasso)などの名所旧跡もあったが、小雨模様の天候と時間不足のため諦めて湖畔と市内を散策しただけで帰ることにした。市内でイタリア人女性が経営する土産物店に入ったがイタリア人特有の商売熱心さに釣られて實君はスイス製鳩時計を買ってしまった。私も記念に陶器の猫親子の置物を購入した。

その後、１４時５５分発電車でロカルノを発ちドモドッソホラ１６時５２分、ブリーク１８時２３分発電車に乗り継いで１９時４３分にブリークへ到着した。

そのまま急いで帰ってもユースホステルの夕食時間帯（２０時まで）に間に合わないと判断し途中で夕食を済ます

ことにした。朝、駅に向かう途中に「ラーメンあります」と日本語で書かれた旗が立てられていたた中華レストランがあったのを思い出し、久しぶりに日本風の味が楽しめると思ってそこへ入った。店はバーも兼ねていて中華料理以外にもいろいろなメニューがあったがラーメンとビールを注文した。しばらく待たされた後に出されたラーメンは、日本の店で食べるものとは大違いで塩味のインスタントラーメンを中華どんぶりに盛ったようなもので、しかも麺が延びていて最低の味であった。

比較的値段も高く、騙されたと思って腹が立ったが仕方がないのでそのまま宿に戻ったところ、未だ食堂が開いており数人の宿泊客が食事中であった。

決められた食事時間帯の最後は食事の受付時間であって食事を終える時間ではないことをはじめて知り、先の行動が馬鹿馬鹿しく思えた。ヨーロッパでは日本と違って食事に長い時間をかける習慣があることをあらかじめ知っておくべきだったかも知れない。

今日も充実した楽しい一日であったが、一つ不愉快だったことはドモドッソホラからの帰りの列車でのことであった。その列車の一等車は数人で利用できる小部屋に区切られたアパートメント様式になっており、我々三人はその一つに入った。そこには五十歳位の女性の先客がいて読書に耽っていた。眉間に皺を寄せた神経質そうな女性で我々の挨拶にも全く応えないばかりか時々不審者を見るような眼差しで我々の見ていて大変不愉快であった。このような思いをしたのはこちらへ来て初めてで、他で経験してきたように言葉がの壁を乗り越えてお互いのコミュニケーションを期待していただけに誠に残念であった。この人はどこの国籍か知るよしもないがヨーロッパ人の中には未だに東洋人に対し偏見を持つ人もいるのかと思うと一抹の寂しさを感じ複雑な気持ちになった。しかしながら大多数のヨーロッパ人、とりわけスイス人は外国人に親切でマナーも素晴らしく、我々が学ぶべき点も多い。

9月20日（水）　　曇り後雨　　**ツェルマット滞在**

今日も朝から天気が悪く山の景色がガスで見えないため温泉地のロイカーバート(Leukerbad)へ出掛けることにした。ロイカーバートには一週間前の１３日にも訪れたが、今回は前回とは別の共同浴場に入った。浴場の規模はほぼ同じであったが、屋外の温泉プールに隣接して屋内のスチームサウナもあり、やっと日本の温泉並の風呂に入った気分になれた。

屋外大浴場のプールで、ぼんやりと湯に浸かっていたところ、元大相撲の小錦関のような太ったご婦人が近づいてきていきなり私の左腕を掴んで引っ張って行くので一瞬何をされるかとビックリしたが、泡のジェットが吹き出す場所に連れて行きそれに当たるようにとの親切な行動であったことが分かった。"Danke schön"とお礼を言うと先方も理解したようで、仲間と女性数人とともに笑顔で応えて呉れた。「中国人か？」と聞かれたようであったがドイツ語が聞き取れず返答出来ずになってしまった。

雨が降り続き辺りの景観も見れずにロイカーバートを後にし、１７時半過ぎにツェルマットへ帰った。

明日は次の滞在地クール(Chur)へ移動することになるが、電車は氷河急行に乗るようにあらかじめ時刻表が出来ているようである。早朝にタクシーを呼んで駅まで運び、氷河急行の予約券を手に入れる予定である。

9月21日（木）　　雨、2000M以上では雪　　**ツェルマットからクールへ移動**

朝６時に起床、７時にタクシーを呼び雨の中を重い荷物を引っ張りながら到着時にタクシーを降ろされた坂の下車場所まで行き、そこで待っていたがタクシーは来なかった。しかし、タクシーは別の道を通って反対側の坂の上に到着して待っているのが分かり、わざわざ呼びに行って荷物のある場所まで誘導した。到着時のタクシーも坂の上のその場所に降ろしてくれていたら、重い荷物を運び揚げる必要もなく僅かに坂を下るだけで済んだと思うと残念な気がした。恐らくあの時のドライバーはこの地域の地図に詳しくなかったか、それとも迂回ルートを避け最短距離を選んでくれたものと思う。

駅に着いて荷物の発送手続きと氷河急行(Glacier Express)の予約手続きを済ませた後に朝食を摂りにユースホステル戻った。

朝食後、宿の精算を済ませ歩いて駅に向かったが、５日間過ごしたツェルマットを去るのは後ろ髪を引かれる思いであった。

ツェルマット発８時５２分の氷河急行に乗り、途中乗り換えなしで１４時３０分にクール(Chur)へ到着した。

氷河急行はツェルマットとサンモリッツ(St.Moritz)を結ぶ1930年以来の伝統を誇る観光列車で、全長268.7Ｋｍを７時間かけてのんびり走る世界一遅い急行列車だと言われており、目的地のクールは終点サンモリッツの少し手前の通過点に位置している。

氷河急行のルートはヨーロッパ大陸の分水嶺に位置し、地中海に下るローヌ川流域から、北海に注ぐライン川の源

流部を通り、さらに黒海に至るイン川（ドナウ川の支流）の谷間へと、まさにアルプスの核心部を貫いて走るゴールデンコースになっている。車両は屋根の部分までガラス張りのパノラマ展望車で編成され、乗り心地も快適であった。

しかしながら生憎の悪天候で遠望出来なかったのが残念であった。同乗の日本人乗客から聞いた話では十数年前までは列車から氷河が間近に見えたが、地球温暖化のためか氷河の先端が年々後退しているとのことであった。

ツェルマットを出発して１時間程経った頃、個々の乗客に食堂車の予約を取りに係員が回ってきた。予約とはいうものの希望時間帯だけだったので、混み合う時間を避けて１３時からに予約した。

食堂車は可成り離れた位置にあったが、予約した時間に訪れたところ少し待って席へ案内された。ここもパノラマ展望車で明るくて雰囲気も良好と思われた。しかし、案内された席が厨房に近かったため、ウエートレス達の行き来や食器類を上げ下げする音が気になって、とてもゆっくり気分にはなれなかった。

メニューから軽食と野菜サラダ、更に地元産ワインのボトルも注文したが、ワインの味は期待した程ではなかった。

３０分程で食事を終えて元の車両に戻ったところ、車内販売が来たので記念に「傾いたワイン・グラス」を購入した。このワイン・グラスは、急勾配を登り降りする山岳列車のＰＲを目的に作られたもので、観光パンフレットには氷河急行の食堂車を利用した記念にプレゼントすると書かれていたが、この列車ではそのようなことはなく、食堂車で出されたワイン・グラスもごく普通のものであった。ちなみに車内で購入したものは１個１５ＳＦであった。

列車は１４時３０分にクールに到着したが荷物が未だ到着しておらず、到着次第にホテルへ連絡するよう依頼して取り敢えず予約していたホテルのミノテル・フレィク(Minotel Freieck)へ行ってチェックインを済ませることにした。

クールは５０００年の歴史をもつアルプス最古の都とも言われ、これまで見てきたスイスの町とは何となく雰囲気が異なっているような印象を受けた。各地で多く見掛けた日本人らしい観光客もここでは全く見られず、街角には不良ぽい若者達がブラブラしていて何となく治安が悪そうに見えて不安になった。町は入り込んでいてホテルの場所を探すのにやや苦労したが地元の人に教えて貰ってようやく辿り着くことが出来た。

ホテルの部屋は純ヨーロッパ風でやや古い感じであったが、広くてゆったりとしていて大変気に入った。

夕方、駅から荷物が到着したとの連絡があり、駅から徒歩１０分程の距離を散歩を兼ねながら歩いて受け取りに出掛けた。駅で荷物を受け取った後、近くのコーポで夕食を調達し荷物とともにタクシーでホテルに戻り夕食を摂った。

夕食後に貯めていた下着類の洗濯をして９時過ぎにベットに入り、疲れていたので直ぐに眠りに就いた。

明日は、リヒテンシュタイン候国(Fürstentum Liechtenstein)とハイジの里を訪ねる遠足の予定である。

9月22日（金）　　曇り　　クール滞在

今日は、最初の旅行メニューにはなかったリヒテンシュタインを訪れることと“ハイジの里のハイキング”を実施することにした。

朝、電車でクールを発ってサルガンス(Sargans)で下車し、そこからバスに乗換えてオーストリアとスイスにはさまれた候国、リヒテンシュタイン(Liechtenstein)の首都ファドウズ(Vaduz)に向かった。バスは約30分でファドウズに到着。小さな町であるが歴史が古く清潔で落ち着いた感じの町である。

リヒテンシュタインに入国した「しるし」に案内所で２ＳＦでパスポートに二色のスタンプを押して貰う珍しいサービスを受けた。山の上にある王宮(Schloss Vaduz)を訪れ、王様が不在の時は城内への入場も可能とのことであったので期待していたが、あいにく王様が滞在中で城内に入ることが出来なかった。日本の皇室とも関係があり、近年、天皇陛下が訪欧された際にこの城にお泊まりになったとのことであった。それにしても城に向かう道路や城の周辺に牛糞が散乱していて余程気を付けないと踏んでしまう危険があった。(周辺に牛が放牧されている)

午前中でリヒテンシュタインを後にし、バスでハイジの里のマイエンフェルト(Maienfeld)に到着した。昼食後、１時間コースのハイキングを楽しんだ。途中で台湾から来ていた男一人、女三人のグループと一緒になり、實君は得意の中国語の会話が出来て嬉しそうであった。

ハイジの里の主人公ペーター少年が住んでいたと言われる古い家も見学し日本人も何人か見かけた。ペーター少年の家は昔のこの地方の貧しい農家の典型とみられ、当時の家具や農具なども展示されていて大変興味深かった。

ファドウズからマイエンフェルトに向かう帰りのバスで学校帰りの高校生とみられる集団に同乗したが、彼らは大人や子供に席を譲り、最後まで立っていたのが印象的であった。日本に比べ若者に対する社会道徳教育が徹底しているからだと思う。

帰りはマイエンフェルトから電車に乗り、１７時過ぎにクールへ帰った。

ホテルに戻り溜まっていた洗濯物を洗濯し、ホテルのレストランで夕食を摂った。今日も大変楽しい一日であった。

9月23日（土）　　快晴　　クール滞在

今日はボーデン湖(Bodensee)の旅に出掛ける予定である。快晴であるがやや寒い。

クール発８時１６分の電車でチューリヒに向かいチューリヒ駅で乗り換え電車を待った。チューリヒは、スイス第一の大都会で、交通の要衝だけあって駅はさすがに大きく、発着する列車の本数の多さに驚いた。駅構内の見易い場所に電光表示板があり、そこには２０本程の列車の発車時刻やホーム番号などが逐次表示されるようになっていたが、列車本数があまりに多いため、発車時刻の２０分くらい前にならないと表示されず、目的のボーデン湖方面行きの電車が表示されるまで不安な気持ちで待った。

１０時１３分発電車でチューリヒを発って約４０分でシャフハウゼン(Schaffhausen)へ到着。途中にシャフハウゼンの少し手前でヨーロッパ屈指と言われるラインの滝(Rheinfall)を車窓から垣間見ることができた。

予定していた１１時１０分の船に乗るため、駅から港まで走って船着場へ行ったが、残念ながらその船は日曜日だけの運行運転であることが分かった。

次の船は１３時３５分であったので止むを得ず市内見物をして待っことにした。また、船旅も四時間半の予定を変更して途中で下船し、電車で予定のコースに戻ることにした。

シャフハウゼンの市内見物では、折から開かれていた恒例の朝市を見学したほか、楽器店やチョコレート店などを訪れて地元の雰囲気を満喫した。楽器店では記念にアルプスの代表的なヨーデルを収録したＣＤを３枚購入した。石畳の通りには重厚な建物が多く、古く伝統のある典型的なヨーロッパ調の町であることを強く感じた。

シャフハウゼン発１３時３５分の船に乗り、ライン川源泉のボーデン湖へ向うライン川を逆上る旅であるが、天気も良く両岸の絶景を眺め途中の港に立ち寄りながらゆっくりと進む。乗客の殆どは甲板に出てベンチに腰掛けながら旅を楽しんでいる様子であった。近くにイタリア語を話す婦人の団体客がいて終始賑やかに喋りまくっていた。会話の内容は知るよしもないが、どうやら夫や子供の話題だったようで何処の国でも同じだなと思った。

当初の予定だったクロイツリンゲン(Kreuzlingen)までの船旅を諦めて途中のシュタイン・アム・ライン(Stein am Rhein)で下船し、あまり時間的な余裕がなかったので町外れの駅まで駆け足で歩いた。シュタイン・アム・ラインの町も古風豊かな町のようであったが、ゆっくり観光することも出来ずに少々心残りであった。

シュタイン・アム・ライン発１５時５６分の電車に乗りロマンスホルン(Romanshorn)まで到着したが、電車はそこで折り返し運転になっているのを知らずに乗っていて気付いた時には一駅を戻ってしまっていた。

別の電車でロールシャッハ(Rorshach)へ到着し、そこでクール方面行き電車に乗り継ぐ予定であったが、ここでも予定の電車を乗り逃がしてしまった。

次の電車を待つ間にボーデン湖(Bodensee)の湖畔を散策した。風が強く少し波が高かったが夕暮れ近い広大なボーデン湖の景色を堪能することができた。このようなアクシデントが重なったにもかかわらず当初のタイムスケジュールより約一時間遅れて１９時３８分着の電車で無事にクールへ戻ることが出来た。

明日は朝食後荷物を次の宿泊地サン・モリッツ(St.Moritz)に送り、午前中にクール市内見物後にサン・モリッツに向かう予定である。

9月24日（日）　　快晴　　クールからサンモリッツへ移動

朝７時前に起床、朝食後全荷物を持ってタクシーを呼んで駅へ行き、荷物をサンモリッツへ託送手続きを済ませてから市内見物をした。日曜日のため商店は閉じていて眠っているような静かな町並みである。

1491年に建てられたと言われるゴシック建築、ザンクト・マルティン寺院(Kirche St.Martin)や十三世紀のロマネスク大聖堂(Kathedrale)、さらにレーティッシュ博物館(Ratisches Museum)を見学した。スイスの最も古い町と言われるこの地方の歴史や民俗を知る上で博物館の見学は大変有益だったと思う。

サンモリッツへバスも出ていることを知り、早速バスターミナルへ行って時間を調べたところ８時と９時１０分の２本しかなく、既に出発時刻を過ぎていたので、仕方なく当初の予定通りに１２時５２分発の急行電車でサンモリッツ(St. Moritz)に向かった。

電車は１４時５５分にサンモリッツへ到着し、荷物を受け取った後にタクシーで宿のユースホステルに向かう。ユースホステルはサンモリッツ湖畔にあり、部屋の広さ、ベットの頑丈さ、食堂、など諸々の設備はこれまでに利用したユースホステルの中で一番である。食事もバイキング方式で内容もよく、多くの家族連れも来ていた。駅まで歩いて約２５分の距離にあるが湖岸のウォーキングコースとして絶好であると感じた。これまでの場所は、男性的なごっごっした岩山が多かったが、ここは女性的な丸みのある樹木の多い山が見える。典型的な保養地で真夏には大勢の人が訪れることと思われる。

ここを拠点とした明日からの観光が楽しみである。

9月25日（月）　　快晴　　サンモリッツ滞在

７時半過ぎ朝食を摂り、サン・モリッツ・バート(St. Moritz Bad)まで約１５分程歩いてバスに乗り、スールレイ(Surlei)まで行き、ケーブルを乗り継いで標高3,303mのコルヴァッチュ(Corvatsch)へ登った。周りの山々が新雪で薄化粧していて特に美しくまさに天国の様である。早朝のためか人出が少なかったが、しばらくすると続々と人が登ってきた。コルヴァッチュ展望台付近の雪の上を歩いて楽しんだ後にケーブルで下山した。

スールレイ発１１時５９分のバスでサンモリッツへ戻り、さらに町を挟んでコルヴァッチュとちょうど反対側にある標高3,056mのピッツ・ナイル(Piz Nair) に登山電車とケーブルで登った。

登山電車の駅、サン・モリッツ・ドルフ(St. Moritz Dorf)が分かりにくい所にあり探すのに苦労した。先ず急勾配の登山電車でチャンタレラ(chantarella)まで行き、そこでケーブルに乗り換えてピッツ・ナイル山頂へ到着した。

山頂駅付近にはシュタインボック（野生山羊）の大きな像があって一緒に記念写真を撮った。往復の登山電車とケーブルの途中で多くのマーモットを見付けカメラを向けたが動きが速いため、果たして上手く写真に撮れたかどうか心配である。　ピッツ・ナイルの頂上レストランで昼食を摂って早めに下山したが、一日に3,000m以上の高山に二つも登ったのは画期的であったと思う。

明日はサンモリッツとイタリアのティラーノ(Tirano)を結ぶベルニナ急行(Bernina Express)の旅の予定である。

9月26日（火）　　快晴　　サンモリッツ滞在

今日は“ベルニナ急行の旅”の予定であるが大分疲れが出てきたので朝はゆっくり出発し早めに帰ることにした。

サンモリッツ発９時３０分の電車ベルニナ号でイタリア領のティラーノ(Tirano)へ向かう。この鉄道の特長は長いトンネルを掘らずにアルプスを越え、１００分の７という急勾配をラックレールを使わずに克服していること、さらにローカルの私鉄なのにれっきとした国際線であることなどである。

標高1730mのサンモリッツを出発して約１時間余で標高2328mのベルニナ峠に到達し、そこからゆっくりと曲がりくねりながら標高436mのイタリア領ティラーノへ降りて行くことになる。ベルニナ峠に近づくに従って右側車窓にモルテラッチュ氷河の雄大な姿が遠望され、やがて一般鉄道としてスイス最高駅の標高2253mに位置するオスピツイオ・ベルニナ(Ospizio Bernina)に到着する。オスピツイオ駅近くの右側に湖面の色が対照的な白い湖(Weißsee)と黒い湖(Schwarzsee)の２つの小さな湖があって白雪に覆われた周囲の山々と共に素晴らしい景観を呈していた。

ベルニナ峠を過ぎて間もなく再び右側車窓に標高3905mのピッツ・バリュから流れる巨大なバリュー氷河が展望された。また、左側車窓にも素晴らしい景色が展望され同乗の現地の人がわざわざ席を空けて写真を撮るよう勧めて呉れた。このように現地の人々の親切な思いやりを受けたことはしばしばで、さすが観光立国を目指すスイス人であると思った。

やがて列車はイタリア領ティラーノに向け急に下って行き、車窓の景色も荒涼とした峠附近の景色とは一変し次第に緑が豊かになっていく。

標高が低くなるに連れて植生が日本のものに近くなり、景色も日本のそれに近くなって行くように感じられた。また、イタリア領に入ると日本でよく見る踏切の信号機と同じ種類のものが使われていて列車通過時に二つの赤ランプの交互に点滅し、「カン、カン･･･」という音が鳴っているのを見て急に日本が懐かしく思った。(ちなみにスイス国内にはこのような信号機は見当たらなかった)

先にロカルノを訪れた時に経験した国境越え時の車内におけるパスポートチェックはこの路線の車中では行われておらず終点ティラーノ駅に着いてから改札窓口で行われていた。入国検査員に「イタリア領に宿泊するか？ミラノに行くか？」と聞かれ、今日中にスイスへ引き返す旨を申し出るとパスポートをチラッと見ただけで通してくれた。もしもイタリア領内に宿泊する場合には所定の書類手続きが必要なようである。

この駅はベルニナ号のターミナル駅としてスイス専用となっており、イタリア国内路線の駅は隣接して駅を出て数十メートルの場所にあって建物も古く、入って見たところ何となく日本国内の駅に似た雰囲気が感じられた。

ティラーノの町を散策してみたが、先ずスイスの町と比較して町の景観や人の様子など何となくごみごみしており、派手な看板も多いといった印象を受けた。折悪しく昼休みの時間帯に当たってしまったために公共施設をはじめスーパーや殆どの商店は午後15時近くまで休んでおり町は閑散としていた。

駅近くのレストランの野外テラスでスパゲッティの昼食を摂り、そこでドイツ人の老夫婦に出会い少しばかり会話を交わしたが、ドイツから日帰りで観光に来たとのことであった。

町の中心部でただ一軒開いていた個人商店に入って買い物をしたが、値札に記された数字の大きさにあらためて驚かされた。ちなみに、イタリアワイン１本が17,500リラであったが、スイスフランしか持ち合わせていないことを話したら16スイスフランで購入することが出来た。

午後、15時過ぎにティラーノを発って朝と同じベルニナ号電車でサンモリッツへ向ったが、途中、ベルニナ峠附近で夕日に輝く素晴らしい風景に魅了され、明日、あらためてこの地を訪れてみようと決意した。
明日は、天候の状態をみながらベルニナ峠附近を散策することにしたい。

9月27日（水）　　快晴　　サンモリッツ滞在

今日はスケジュール外で昨日の電車の中で急に思い付いたベルニナ峠方面の散策の旅を実行することにした。このように現地の状況をみて臨機応変の行動ができるのは旅行者のツアーでは決して出来ない今回の旅行の特典である。
サンモリッツ発９時５分のベルニナ号電車に乗って標高2082mのベルニナ・ディアヴォレッツア(Bernina Diavolezza)まで行き、そこからケーブルで標高2973mディアヴォレッツア山へ登った。
素晴らしい快晴に恵まれてそこから標高3905mのピッツ・バリュー(Piz Palu)や4049mのピッツヘルニナ(Piz Bernina)かど、イタリア国境の山々が手に取るように見えた。
また、眼下には壮大なモルテラッチュ(Morteratsch)氷河が横たわっているのが展望され、すぐにも降りて行って氷河を間近に見たい衝動にかられた。実際に頂上レストランでは氷河を徒歩で横断するツアーを募集しており、ガイドを先頭に３０名程の団体が出掛けて行ったが、しばらくすると大きなクレパスの間を移動する蟻の集団のように見えて氷河の大きさを実感させられた。
山頂附近にしばらく滞在した後にケーブルで下山したが、鉄道沿線附近で建設工事用ヘリコプターが忙しく飛び回っているのが見られた。
ベルニナ・ディアヴォレッツア駅から再び電車に乗り、そこから二つ目の駅で標高2253mのオスピッツオ・ベルニナ(Ospizio Bernina)で下車した。この駅はベルニナ峠にあって一般鉄道としては標高がスイス最高所駅とのことである。
近くの小さなレストランで昼食を摂った後に直ぐ近くにある「白い湖」(Weißsee)を回るハイキングに出掛けた。
駅付近から少し山道を登った後に鉄道線路を横断して白・黒二つの湖の中間附近に下りて行ったところ、そこにWasser Grenze（分水嶺）と書かれた黄色い看板が立っていて後で調べたところ「黒い湖」(Schwarzsee)の水はイン川を経て黒海へ、「白い湖」の水はポー川を経て地中海に注ぐことが分かった。それにしても僅か二百メートル程度しか離れていない二つの湖にある水の流れ着く先が大きく異なるとは何か人生を暗示しているように思えてならない。
「白い湖」の周りは起伏に富んだ絶好のハイキングコースとなっており、何人もの地元のお年寄り女性がマイペースでゆっくりとハイキングを楽しんでいる姿を多く目にした。
湖を左回りに約四分の三周した後に湖を離れて標高2091mで鉄道沿線の駅のあるアルプ・グリュム(Alp Grum)まで歩いた。途中の道はなだらかな坂道を登った後に急な下り坂になっており、坂道を登り切ったところにレストランがあり、その近くに石室を利用したワイン貯蔵庫もあってなかなか由緒のある場所らしい。
レストランから駅へ下りる急な坂道からはピッツ・パリュを起点とするパリュ氷河が真正面に見え、更にその下には一筋の滝が流れ落ちる光景が見られた。
アルプ・グリュム発１５時の電車でサンモリッツに向かい１６半過ぎにサンモノッツのユースホステルに無事帰着した。
今日は思いつきの予定外の行動であったが、スイスの大自然の中でウォーキングを体験し思い出に残る一日であった。

9月28日（木）　　曇り、ガスが多く見晴らし良くない　　サンモリッツ滞在

今日は、オーバーエンガディン(Ober Engadin)峠のバス旅行を予定している。
朝、ユースホステルから徒歩３０分程の距離にある高級リゾート地にあるサンモリッツ・バート(St. Moritz Bad)まで歩いてポストバスに乗り、山道を登った後に急な坂道を深い谷に向かって下り、イタリア領のカスタセグナ(Castasegna)まで足を延ばした。ここには国境検問所があって拳銃を所持した２人の警察官がおり、国境を通過するマイカーなどに検問を行っていたが、歩行者に対しては何の咎めもなく、念のため国境ゲートを何度も行き来してみたが何も言われなかった。
カスタセグナ附近にはイン川の支流とみられる急流がイタリア領に向かって流れており、植生や風景は日本ののどかな山村に似た感じがした。ハイキングのつもりで一つ手前のバス停まで約３Ｋｍの道を徒歩で戻ったが、途中に栗の木もあって道路に落ちていたクリの実を拾って食べたりして日本を懐かしんだ。
また、途中のガソリンスタンドで表示されている燃料価額表を見たところ、レギュラーガソリンが最も安く、次いでハイオクガソリンと続きジーゼルエンジン用の軽油が最も高くなっていることが分かった。恐らくこれは国の環境

保護政策を反映しているものとみられ、公害の元凶であるジーゼルエンジン用軽油が最も安くなっている日本の現状をと対比してこの面における日本の取組の遅れを実感した。

一つ手前の村の郵便局前から再びバスに乗り急な山道を登って山の中腹にある石作りの部落セガンティニ(Segantini)へ到着した。ここはスイスの中でも名高い僻地の古い部落らしくスイス人の観光客が大勢訪れていた。終点のバス停附近には１７７０年と銘打った泉もあって、日本の秘境といわれる会津地方の檜枝岐部落を思わせるような古い歴史のある所らしい。

中心部の小さなレストランで郷土料理（？）の昼食を摂った後、石作りの家が建ち並ぶ部落を散策したが、家々には乾燥された牧草が保管されていて人が住んでいる気配は見当たらず異様な感じさえした。また、村外れの山道を散策してみたが遠くにアルプスの山々を望む素晴らしい環境であった。耕地が殆ど見当たらないことから部落の人々は牧畜を営み、日中は放牧に出掛けていて留守だったのではないかと思った。部落の中にはホテルとレストランのほか、小さな商店もあったが道は狭く、到着したバスがバス停で辛うじて方向転換するスペースしかなく、もちろん部落内への車の乗り入れは不可能であった。地元ではクリが特産品らしく、商店の店先で色々な加工品が販売されていた。

３時間ほど滞在した後にバスで山を下り、麓の郵便局前でサンモリッツバスに乗り換えて帰路に着いた。

途中の小さな町マロヤ(Maloja)に有名な画家ジョヴァンニ・セガンティーニのアトリエがあるというのでここで下車し、次のバス時間まで見学することにした。この画家は北イタリア生まれでエンガディーンの風景や生活を描き続けてこの地で没したといわれ、彼のアトリエがセガンティーニ美術館(Segantini-Museum)として保存され、石積みの丸屋根の建物の中に多数の作品が展示されていた。

町外れにあるバスターミナルまで歩いて再びサンモリッツ行きのバスに乗った。途中、ヘリコプターと救急車が忙しく行き交う光景を目にして最初は災害救助訓練かと思ったが、アルプスの山で怪我をした人を搬送していると聞いてビックリした。アルプスの山に憧れて大勢の観光客が集まるスイスならではの日常珍しくない光景らしい。

サンモリッツ行きバスにも色々とルートがあるらしく、今朝に出発したサンモリッツ・バートとは遠く離れた山の中腹にあるサンモリッツ・ドルフ(St.Moritz Dorf)へ到着してしまった。ここは先日のピッツ・ナイルへの登山電車の出発駅のある所である。

仕方なくそこから湖畔に向かって５０ｍ程の高低差を歩いて下って来たが思いの外に遠く感じた。

今日はイタリア国境の山間僻地を歩いて少し疲れたが数々の思い出深い経験もして充実した一日であった。後で分かったが今日訪れたエンガディーン地方ではスイスで少数派のロマンシュ語を話す人々の圏内とのことである。

５日間滞在したサンモリットであったがいよいよ今日は最後で、明日はルツェルン(Luzern)へ向かうことになるのでスーツケースに荷物を纏めベットに入った。

9月29日（金）　　曇り　　**サンモリッツからルツェルンへ移動**

朝食時にユースホステル内の食堂で中国人の若い三人娘と席を共にし、實君が得意の中国語で対話を行った。

香港から３週間の休暇を取ってスイス旅行にきているＯＬとのことであったが、近年、中国では一般人も海外旅行ができる時代になったようである。尤もこのようにユースホステルを利用すれば一泊二食付きで41スイスフラン（日本円2，500円弱）なので日本を旅行するより安く上がる計算になり、交通費もスイスパスを利用すればさらに安くなるはずである。豊かで本当に良い時代になったものである。

朝、ユースホステルの精算を済ませた後、タクシーを呼び９時過ぎに出発しサンモリッツ駅で荷物の発送手続きを行った後に電車でルツェルンへ向った。ルツェルンへの荷物の到着は夕方１８時過ぎになると聞いて途中のチューリヒ(Zürich)で下車し市内観光を行うことにした。

チューリヒはスイス第一の都市だけあって流石に大都会の感じがする。市内には路面電車が足繁く通い街を歩く人々も何となく洗練されていて都会的な感じである。

チューリヒ中央駅広場からチューリヒ湖畔に至る約1300ｍのバーンホーフ通り(Bahnhofstrasse)と呼ばれる駅前大通りを歩いたりしたが、道路にはガードレールがなく広々としていた。また、路面は人と車と電車が渾然一体となっているが日本の都会のような慌ただしさがなく落ち着いた雰囲気が感じるのは不思議でならなかった。恐らく人々が大人で自分の行動に自信と責任感が伴っている結果ではないだろうか。

市内を散策中、有名なチョコレートの老舗シュプリュンギリ(Sprüngli)へ立ち寄り帰国時のお土産用として沢山の生チョコレートを購入した。さすがに有名だけあって値段は高めで品数も多く選ぶのに戸惑ったが、支払いはクレジットカードで簡単に済ませた。

大通りから少し入った所に緑地公園があって何人かの人々が芝生に寝ころびながらゆったりと時間を過ごしていたので、我々も近くの店でパンと飲み物を買ってそこで食事を済ませた。

１５時過ぎにチューリヒを発ち約１時間程でルツェルンへ到着し、地図を頼りに予約してあった宿泊場所のホテル・ドライ・コニーグ(Hotel Drei Konig)を探し当てた。
ホテルは駅から歩いて１０分程の距離にあって、途中に二つの大きな教会もあり礼拝の時間だったためか鐘が長時間鳴り響きあたかも我々の到着を歓迎しているかのようであった。
ホテルにチェックインし、別館の２階の部屋に案内されたが窓から望む景色はくすんだ赤瓦の屋根が立ち並ぶヨーロッパの典型的町並みに見えた。
ホテルのフロント係に日本のテレビで人気者のダニエルカールによく似た人がいて愛想良く対応してくれたし、また、日本から阪急トラピックスの団体観光客にも偶然に出会い、そのガイドが以前に東南アジア旅行でお世話になった森田さんらしかったので近づいて話をしようとしたが、彼女は忙しそうに動き回っていて果たせなかった。彼女は主にエジプト方面の担当と聞いていたが、まさかここで再会するとは奇遇であり驚きであった。
夕方、駅に荷物を受け取りに出掛け、タクシーでホテルまで運んだ。
このホテルの部屋はやや狭い感じてあるが２泊だけなので我慢しよう。

9月30日（土）　　小雨／雨／ガス多い　　**ルツェルン滞在**

朝から今にも降りだしそうな天気であったが、ここでの滞在は今日一日であるため少し無理してピラトウス(Pilatus)山への旅へ出掛けることにした。
ルツェルン駅近くの港からフィーアヴァルトシュテッテ湖(Vierwaldstätter See)の定期遊覧船に乗り二、三の港に寄港しながらアルプナーハ湖(Alpnacher See)に入り、アルプナハシュタット(Alpnachstad)で下船した。この二つの湖は運河で繋がっており、頭上に鉄道や道路も通っていてその橋梁の下を潜る際に船の天井が接触しそうで肝を冷やす場面もあったが何とか無事に通過することができた。船内放送で盛んに観光案内もされていたがドイツ語のため内容までは理解出来なかった。
港から300m程離れた所にピラトウス山頂への登山電車の発着駅があり、そこから標高2129mの山頂に向けて急勾配の軌道をゆっくりと登って行った。ここは１０m進む毎に4.8mを登るという世界一の急勾配の線路が有名で、そこを走る真っ赤な色の電車は外形が傾斜に沿った並行四辺形で内部は階段状に座席が配置されていた。
電車は轟音を立てながら岩を刳り抜いたままのトンネルや岸壁に張り付くように敷かれた線路の急勾配を進み途中の中間点の駅で下り電車のすれ違いのために短時間停車した以外は無停車で登った。約２０分程で山頂駅のピラトウス・クルム(Pilatus-Kulm)に到着した。土曜日のためか乗客には小中学生の子供も多く急勾配を行くスリルに歓声を挙げていた。
山頂駅の改札口と屋外テラスに「標高2132mピラトウス山へようこそ」と書かれた日本語をはじめ、中国語、韓国語など計８ケ国の言葉で記された歓迎用の大きな看板が並んで立っていてビックリしたが、この国の観光客誘致への並々ならぬ熱意と努力を感じた。
山頂には深い霧が立ちこめていて周りの景色どころか数メートル先も見えない状態で、屋外テラスのフェンスには十数羽の高山でよく目にしたことのあるカラスに似た鳥がたむろしていた。この鳥は嘴（くちばし）はオレンジ色であるが外形はカラスそっくりで、恐らく濃霧のために視界を失っていたためと思われる。
晴れていればベルナー・オーバーランドの高峰とフィーアヴァルトシュテッテ湖を展望出来るはずであったが、仕方なく山頂を一周する絶壁に造られた遊歩道を歩いてみることにした。周りは霧で何も見えなかったが途中に梯子で登る所もあって、もし晴れていたら高所恐怖症でかえって歩けなかったかも知れない。
天候が回復する気配もなく小雨が降って寒かったので早々に下山を決意し、登ってきた登山鉄道とは反対側のロープウェイを利用して下山することにした。下山ルートは中継駅のフレクミュンテック(Fräkmüntegg)まで大型のロープウェイで下り、ここで４人乗りのゴンドラリフトに乗り換えてルツェルン市内のクリエンス(Kriens)まで下りることになっている。
ロープウェイの乗車定員は１５０名で、改札に並ぶ人々を順番に受け入れ定員に達すると自動的に改札ゲートが閉まり、その後の順番の乗客は次の便に回されることになっている。折悪しく私が通過した段階でゲートが閉まってしまい弟達二人は取り残されてしまった。やむを得ずフレクミュンテックまで一人で行き次の便を待ったが昼食時を挟んで運転間隔が長い時間帯であったために４０分程待ってようやく合流することが出来た。
フレクミュンテックからは４人乗りのゴンドラリフトを３人で占有し、なだらかな山麓に沿ってゆっくりと下りて行ったが山頂と違い見通しも良くルツェルンの町並みが大変美しく見えた。
クリエンスに到着後、近くのスーパーマーケットで帰国のお土産用にチョコレートなどの買い物をしてルツェルン駅まで戻りホテルに帰った。

スイスに来てから市内を走るトロリーバスを利用したのは初めてでスイスパスも有効であったが、ここでもスイス国民の素晴らしい大人の世界を垣間見ることが出来た。

トロリーバスの停留所にコインを入れる料金箱が置かれ、利用者は乗車の際に自主的に料金を投入することになっているらしい。乗車券はなく、もちろん車内でも検札もないが良くもこれで運用システムが成り立っているものかと驚きである。車内をよく見ると乗降口の上に「アンフェアに乗車した者には70SFの罰金を徴収する」との英語とドイツ語で書かれた小さな掲示があったが果たして不正乗車はどの程度か興味深い。

旅行ガイドブックによれば、スイス国内では交通違反を含む罰金の支払いにクレジットカードも使用できるとのこと、さすが大人の社会であると感心した。

明日はいよいよ帰国の途に着くのでスーツケースに荷物を纏め、夕方、タクシーでルツェルンへ運んだ。チューリヒ空港駅までの配送手続きのつもりで受付窓口へ行ったところルツェルンなどスイス国内の主要駅から空港内手続きも一括して行うことが出来ることが分かった。そのためにはパスポートと共に航空クーポン券も必要だと言われて實を残し剛君と一緒にホテルまで取りに戻った。その間の荷物は親切な女子職員が事務室内に預かってくれた。

航空クーポン券を持って駅に戻ったところ窓口には十人以上の行列が出来ており、その最後部に並んで待つことにした。夕方のためか受付窓口は一つしか開いておらず、職員は必死になって処理していたが遅々として進まなかった。それというのも先客の一人が難しい手続きが必要だったらしく処理に１５分以上も要したが誰一人不満を訴える人もなく静かに順番を待つ姿に成熟した大人の社会を感じた。

ここにはＸ線検査設備もあって空港内で行う荷物検査を代行して行うシステムになっており、ここで受付された荷物はチューリヒ空港での手続きなしに関西国際空港へ直送されるとのことである。

スーツケースの発送手続きを済ませてホッとした気分でスイス最後の夕食を摂ることにした。

駅付近のフィーアヴアルトシュテッテ湖から流れ出るロイス川の流出口に架かるルツェルン名物の屋根付き湖水橋、カベル橋(Kapellbrüke)を渡り対岸のレストランで市内の夜景を鑑賞しながらささやかな晩餐会を開いてホテルへ戻った。

10月1日（日）　　小雨後曇り　　**ルツェルンからシンガポールへ**

一ヶ月間にわたった異国の地での生活を終えて今日は帰国の着く日である。過ぎてしまえば一カ月は短かく感じられるし数々の貴重な体験や楽しい思い出もあって七十年間の我が人生にとっても最も充実した期間だったと思う。現地の生活に馴れてようやく独り歩きが不自由で無くなった頃に帰らねばならないのは少し心残りの気もするが致し方ない。

朝食後、ホテルの精算を済ませて徒歩でルツェルン駅に向ったが、日曜礼拝のためか各所の教会から一斉に鐘が鳴り響き駅に着くまで続いていた。日本ならば騒音公害として苦情を言う人も出ると思うが、敬虔なクリスチャンが多いこの国ではそのようなことはないらしい。正装をした家族が揃って教会へ向かう姿も多く見られた。

駅近くの道路の歩道では、スイス各地で見られたような朝市が開かれ、地元で採れた野菜、生花、チーズや日常雑貨のテントが並び人々で賑わっていた。

また、道路脇の湖畔で釣りを楽しんでいる人もいたので近づいて、その一人に釣果を尋ねてみたところ自慢気に魚籠の中を見せてくれた。中には２０センチ以上もあるウグイに似た魚が十数匹入っていた。「この魚をどうするのか？」と尋ねてみたところ、「家に持ち帰り、料理して食べる」との返事であった。このように現在でも都会のど真ん中で穫れた淡水魚を何の不安もなく食べられるこの国の自然環境を羨ましく思った。

１０時１０分発電車でルツェルンを離れ約１時間後にチューリヒ空港駅に到着。昨夜、関空宛に荷物を発送しておいたお陰で空港では煩わしい荷物の引き取りや発送手続きの必要はなく、直接に搭乗ゲートに行けばよいので気が楽であった。

チューリヒ国際空港には、ＡとＢの二つのターミナルがあってシンガポール航空の発着はＡターミナルということだったので行ってみると窓口が見当たらなかったので係員に尋ねたところＢターミナルと分かり少々慌てたがスーツケースの荷物が無かったので助かった。

搭乗手続きと手荷物検査を済ませた後、弟達は残ったスイスフランを使い切るために買い物に散って行ったが、私はスイスフランの現金を全て使い果たしていたのでその必要はなかった。弟達を待つ間に構内の売店で少しの買い物もしたがクレジットカードの支払いでＯＫであった。

１３時２５分発シンガポール航空(SQ345便)は約３０分遅れて１４時過ぎに出発した。ジャンボ機で乗客は満員の状態であったが往路と違って揺れもなく快適なフライトであった。

10月2日（月）　　天気不明　　シンガポールから関西空港へ

早朝の現地時間７時１５分に無事シンガポール空港に到着した。関空への出発は夜遅くであるのでその間にシンガポール観光を行うことも話し合われたが結局、ホテルで休養して長旅の疲れを癒すことにした。

スイスに向かう際に空港内にトランジット客向けのホテルがあるのを見付けていたのでそこを利用することにした。一人当たり日本円4000円で２２時まで過ごせるトリプルルームを契約したが、完全に屋外と遮断された静けさと空調の効いた快適な環境の中で我を忘れて夕方まで熟睡した。

１７時過ぎに夕食を摂りに出掛けたが空港内の何れのレストランもシンガポールドルか日本円の千円札（一万円札は高額すぎてダメ）でないと支払いが出来ないと断られた。あいにく三人とも千円札は持ち合わせておらず、さりとて一万円をシンガポールドルに両替すのも無駄が多いと迷った結果、實君が構内の免税店でワインを購入し、千円札を含む日本円で釣り銭を手にすることが出来た。　我々三人はその千円札を使って漸く夕食にありつくことが出来た。釣り銭はシンガポールドルで受け取ったが、現地で使い果たしたことは申すまでもない。

スイスでは商売熱心のためかどの店も自国通貨以外にも日本円やフランスやイタリア通貨による支払いに応じていたのに比べ、この国の融通性のなさを痛感し腹立たしく思った。

出発までの時間を空港内の各所や売店などを見て回ったが、最近、新装開港したチャンギ空港ターミナルビルは成田空港や関西空港に比べはるかに広大で世界トップクラスであると実感した。動く歩道など日本製の設備も多く利用されていたが、構内全般にわたり百近くある搭乗ゲート付近の造りがみな同じであるため余程注意しないと迷子になる恐れがあると思う。とりわけ初めての人にとっては自分がどこに居るのか位置感覚さえ見失ってしまいそうである。

２３時５５分発、シンガポール航空(SQ986便)で関西空港に向けて出発したが、十分に休養を摂ったために体調も良く快適な旅を続けることが出来た。また、座席も機内最後尾の位置で座席間隔も広く取られており、しかも空席が多かったためにゆっくりくつろぐことが出来て幸いであった。

10月3日（火）　　小雨後曇り　　関西空港から仙台空港へ、そして帰宅

早朝、７時１０分に関西空港に無事到着した。一ヶ月ぶりに見る祖国であったが未だ残暑が続いていて蒸し暑く、人々の様子も何となく忙しそうに感じられた。

入国手続きを済ませた後、荷物の受け取り窓口を訪れたところ、ルツェルン駅から発送したスーツケースが無事に届いており、受け取った後に国内宅急便の受付窓口で自宅宛に配送依頼手続きを行った。

弟達も同様に手続きを済ませたが、このまま帰途に着くとラッシュアワーにかかるため、構内の喫茶店で一緒にコーヒーを飲みながら時間を過ごすことにした。

旅の思い出を語らいながら約１時間ほど過ごした後にそれぞれの自宅に向けて帰って行き、私は仙台行きの便を待った。　暫くして仙台行き全日空便の案内があり、それに搭乗することも可能であったが往路で利用したフェアリンクの小型ジェット機が気に入ったので敢えて待つことにした。

１１時発のフェアリンク(FW3001便)で関西空港を発って１２時過ぎに仙台空港に到着したが、比較的天候にも恵まれて快適なフライトであった。

仙台空港からリムジンバスと地下鉄を乗り継いで１５時過ぎに無事我が家へ到着した。

ここ一ヶ月間は殆ど日本のニュースに接する機会がなく情報に疎くなっていたので、三宅島噴火災害による全員離島避難などの事件を家族から聞いてビックリした。すっかり浦島太郎のようになってしまったようだが、この期間中の情報ギャップを取り戻すには容易ではないように思う。　　＜ 完 ＞